

学者アラムハラドの見た着物

学者アラムハラドの見た着物

神奈川県 今井美和

この作品は、残念ながら、途中から原稿が失われていきます。しかし、残された原稿だけでも大変な力を持っています。実は、賢治の死後に他の原稿の置き場所とは別の押入れから一篇だけ発見された作品だそうです。賢治にとって特別な作品だったのが、発表するに値しないと感じていたのが、「雨ニモマケズ」のように秘匿しておこうとしていたのが、その真意はわかりませんが、私にとつては特別な作品であることに変わりありません。

アラムハラドは十一人の子どもを教えている学者です。その中でアラムハラドは子どもたちに問いかけます。小鳥が啼かないでいられず魚が泳がないでいられないように、人はどういことがしないでいられないか、人が何としてもそうしないでいられないことは一体どういこと

とだろう、と。

それに対して最初に「人は歩いたり物を言ったりいたします」と答えるタルラ。アラムハラドに「足や舌とも取りかえるほどもっと大切なものがないだろうか」と問い返され、「私は飢饉でみんなが死ぬとき若し私の足が無くなることで飢饉がやむなら足を切っても口惜しくありません」と答え直します。

さらに、「人が歩くことよりも言うことよりもっとしないでいられないのはいいことです」と答えるフランダ。それを受けてアラムハラドは、「すべて人は善いこと、正しいことをこのむ。善と正義のためならば命を棄てる人も多い」「決してこれを忘れてはいけない。人の正義を愛することは丁度鳥のうたわらないでいられないと同じだ」と答えます。

最後にセララバアドという子は、こう答えるのです。

人はほんたうのいゝことが何だかを考へないでゐられないと思ひます。

それを聞いて目を閉じたアラムハラドは、青く美しい

心象を見ます。そして、一つ教えます。

うん。さうだ。人はまことを求める。真理を求める。ほんたうの道を求めるのだ。人が道を求めないでゐられないことはちゃうど鳥の飛ばないでゐられないとおんなじだ。おまへたちはよくおぼえなければいけない。人は善を愛し道を求めないでゐられない。それが人の性質だ。これをおまへたちは堅くおぼえてあとでも決して忘れてはいけない。おまへたちはみなこれから人生という非常なけはしいみちをあるかなければならない。たとへばそれは葱嶺^{パミール}の氷や辛度^{しんど}の流れや流沙^{るさ}の火やでいっぱいなやうなものだ。そのどこを通るときも決して

今の二つを忘れてはいけない。それはおまへたちをまもる。それはいつもおまへたちを教へる。決して忘れてはいけない。

このセラバアドやアラムハラドの言葉は、私をずっと支えてくれました。世の中の全てがどうでもよくなくて自暴自棄になりました。自分の中にある何を支えに生きていけばいいかわからなくなったときも、もつ、これしかないという思いで、繰り返し繰り返しこの言葉を読みました。最近、人を裁いてしまいそうになるときに、この言葉を思い出します。

これから、この言葉は私を支えてくれます。真実の言葉だからです。

イーハトーボ農学校の春

『イーハトーボ農学校の春』

―太陽マヂックが見せてくれた本当の自然の姿

神奈川県 近藤美樹子

冒頭からいきなり「太陽マヂックのうた」がごうごう鳴り響き、楽譜と「コロナは六十三万二百」などの意味不明の数字があちこちに散りばめられた何とも不思議な作品です。まばゆいばかりの太陽の光が作品の初めから終わりまでそこらじゅうに満ち、その光の強さが尋常ではありません。物語は、春になり農学校の生徒たちが賢治に引率され肥溜めから麦畑まで肥桶をかつぎ麦にかけるといったただそれだけなのですが、春が来た喜びと相まって太陽はますますその輝きを増し、目に飛び込んでくる自然が生き生きと描写されていきます。私はその中で、肥溜めから肥がビールの泡のようにあふれ出るところと

青いつやつやした麦に肥がかけられ水銀のように光る玉となって飛び出すところが特に鮮やかに心に刻印されて忘れることができません。肥は、もし日常でそれを目にしたら汚いと思うのに、この作品では本当にきれいで好ましいものとさえ感じられるのです。それが何とも不思議でした。作品の中でこれらの箇所は次のように描かれています。

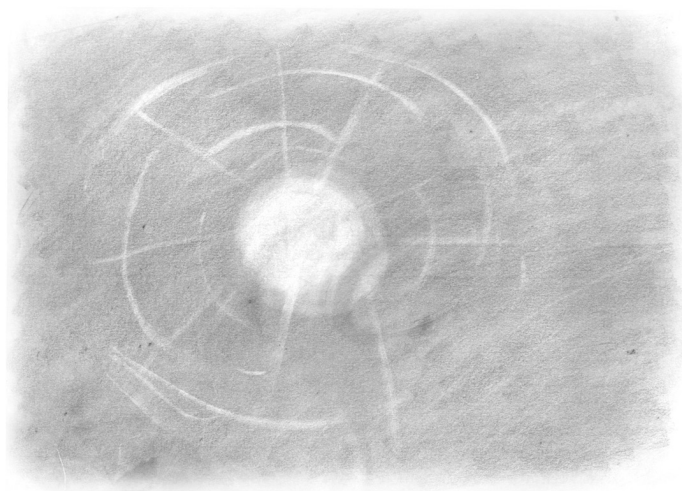
そこらいつばいこんなにひどく明るくて、ラヂウムよりもつとはげしく、そしてやさしい光の波が一生けん命一生けん命ふるへてゐるのに、いったいどんなものがきたなくてどんなものがわるいのでせうか。もうどんな泡があふれ出してもいいのです。

わたくしたち^{ひしやく}柗^{こえ}構で肥を麦にかければ、水はどうしてそんなにまだ力も入れないうちに水銀のやうに青く光り、たまになつて麦の上に飛びだすのでせう（中略）。もうほんたうにさうでなければならぬから、それがたゞひとつのみちだからひとり

でどんどんさうなるのです。

肥が美しいものにならわっているのは「太陽マヂック」によるものです。この作品中の太陽はただの天体ではなく「光炎菩薩太陽」です。この光炎菩薩の光の下では肉眼の眼には見えない木々の中でちらちらゆれる樹液や草花の芽に浮き沈みする澱粉の粒、あるいは日光の葦や橙や赤の波などがまるで顕微鏡でも見るようにくっきりと見えてきます。「神さま・仏さまの眼で見るように」と言ったほうがよりふさわしいかもしれません。賢治の霊眼には、太陽はまばゆい愛の光を放つ菩薩であり、自然界は、植物・動物はもちろん土や水や風や光も生き生きと生きているものとして見えています。この作品を読む人は光炎菩薩の魔法にかかり肉眼では見えない世界を体験しますが、実はこれこそがこの世界の真相、本当の姿なのではないでしょうか？ 本当は光に満ちた美しい世界であり、汚いものも悪いものも存在しないのです。だからこそ私の心のフィルムにこれほど強く感光して強烈に焼き付いてしまったのです。

世界の人々がみなこの「神さま・仏さまの眼」を持つことができれば、どんなに素晴らしい世界が展開するのでしょうか！ その日を目指して私も心の眼を磨きたいと思いました。



絵 熊谷直人

「イギリス海岸」

「イギリス海岸」の感想

神奈川県 萩野なおみ

私は「イギリス海岸」という話が好きです。北上川と猿ヶ石川の合流点から少し下流の西岸あたりを賢治は「イギリス海岸」と名付けており、それはドーバー海峡の白亜の海岸を連想させるからだそうです。この話では、学校の先生である「私」と生徒の交流が描かれています。生徒を温かく見守る「私」の眼差しが感じられ、(あまり学校に馴染めなかった私でも) 読んでいると不思議と安心した気持ちになります。また、自然を見る目がとても不思議で川や木や石、様々な太古から生きている自然に対し、自ずと敬意や慈しみを感じます。

この作品のなかでの「私」と救助係との会話の場面が印象的です。教師の「私」はこの救助係のことを「あの男はやっぱりどこか足りないな」と感じつつも、実際話

をしてみると実はずいぶんよく北上川で泳ぐ人たちのことを心配し考えていたことが分かり、「誰でも自分だけは賢く、人のしてゐることは馬鹿げて見えるものですが、その日そのイギリス海岸で、私はつくづくそんな考のいけないことを感じました。」と自身の軽率さを責めます。この箇所を読むとつい自身の日常生活を振り返ってしまい、今まで、そして現在もどれだけ人や周りのことを馬鹿にして見てきたことだろう…といたたまれなくなってしまうです。

また「私」は「実は私はその日までもし溺れる生徒ができたなら、こっちはとても助けることもできないし、たゞ飛び込んで行つて一緒に溺れてやらう、死ぬことの向ふ側まで一緒について行つてやらうと思つてゐただけでした。…(略)そして私は、それが悪いことだとは決して思ひませんでした。」と語ります。

この場面を読むと、私は忘れることのできない高校時代の出来事を思い出します。ボート部に所属していた私は、とある試合の後、乗っていたボートのバランスが崩れ転覆し溺れかけてしまいました。運悪く身に着けてい

た救命胴衣もうまく機能せず、近くまで来てくれた救助艇も目の前で故障し、そして川の中は急な流れのため泳いで岸まで辿り着く自信はともありませんでした。私は転覆したボートに必死に捕まっていたましたが、段々と体も疲れてきて「もうダメかも…」と思っていた。その時、ボート部の監督である先生が一人飛び込んできてくれ、溺れかけた私を助けてくれました。その後その先生は、私が卒業した翌々年に他校の生徒を守る形で他界されました。

その先生にはどれだけ恩を返しても返しきれません。そして私もその恩師に少しでも近づけるように、人や周りを愛し助けられるような人になりたいと思います。

「イギリス海岸」のように先生と生徒の温かい交流が描かれている賢治の作品は他にもありますが、どの作品を読んでも、一人一人の教え子に対してどこまでも優しく静かに寄り添う先生の姿を感じます。読んでいるだけでも癒されますが、こんな学校や先生が少しずつ増えていけば、どんなに子どもたちは安心して育っていけるだろうと思います。



絵 渡正子